



紫陽花やはなだにかはるきのふけふ

子規

人の心の移ろいを映し出すようなアジサイが見事に咲いています。梅雨の暮らしをほんのりと楽しませてくれ、みずみずしく咲き誇るアジサイは、万葉集にも歌われている花です。

梅雨本番、心なしか、街の中も煙ったように見えますが、薄紅に青や紫と咲き誇る姿は、やっぱり雨が一番似合います。日本育ちのアジサイはサクラほどの見事さはなくても、梅雨の季節を彩っています。

紫陽花や きのふの誠
けふの嘘 子規

色が変わることからアジサイは「七変化」「八仙花」の名もあります。それが「心変わり」と結びついて、バラやサクラのような良い意味での花言葉はありませんが、ヨーロッパなどではむしろ喜ばれている花です。

アジサイを眺めていると『男はつらいよ』の寅さんと

思い出します。映画「寅次郎あじさいの恋」は、鎌倉のあじさい寺が舞台になっていました。「いしだあゆみ」さん扮するマドンナのデートの申し込みに、妙に自信無げで結局は失恋するいつものストーリーですが、マドンナの愛もアジサイの花も、妙に切なくもの悲しいシーンが浮かんできます。

昨年秋にまいた麦が黄金色の穂をたつぷり実らせ、収穫の最盛期を迎えた一面の景色がまるで金色の大海原だからでしょうか、今の時期を「麦の秋」ともいいます。

先日、スーパーで青梅を見かけました。もぎたての初々しさに、手に取って嗅いでみました。里の風景とともに、まだ幼かった遠い日のことが浮かんできて、しばし懐かしさに包まれました。

「青梅は決して食べてはいけない」。親から注意された昔

が、懐かしく思い出されます。下痢や腹痛を引き起こすので、口酸っぱく言われたのうなげますが、団塊の世代ではこっそり口にした覚えのある人も案外多いはず。

それも日本がまだ貧しかった時代のこと。豊かになった今では、青梅を食べようという子どもはいないでしょうし、そんなことを言う親もいません。青梅を前に、懐かしさの一方で今昔の差に複雑な気持ちにもなります。

「梅はその日の難逃れ」という言葉もあります。朝、梅干しを食べると、その日一日災難に遭わず元気に過ごせるといわれます。古くから梅干し入りの「日の丸弁当」を愛用してきたのも、こういう理由からなのかもしれません。



指宿市長
豊留悦男